家廟遺墨

伯仲二兄 兩叔父 外大父 外伯母 至
族祖真中翁 外戚松澤翁 外叔母 吏伊藤翁

第五止

600
130

伯兄羅文君

禪興旨瀧澤
直次命後改号
夏右工門

天明五年の春鶴忠子は奥州の郡
書を已元の即鶴忠子より別見之文
書中小坂元治公とあるは甲斐勤番支
配加藤駿河守成寅時主君戸
田藩の同僚なり伯兄代六歳の筆

寛政中賜解手書共二通

元和八寛政七年のものなり
伯兄三十七八歳の筆なり

瀧澤文庫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天明五年
四羅文君奉叔父弟子宛書一通

この年羅文君甲斐ニ在り
弟子名名ハ定点御和ト
組同心之長則　先考の弟

改年之御慶申納
書面之趣承届候
如仰拙僧儀
滝沢家
正月十五日

仲兄鶏忠君 名興春 滝沢蟹丸 星霜跡十五通

安永中 高田氏の教授せられたる人なれども則仲兄十四五才の筆なり

同筆詠草 縁もの近勝の印 鶏忠の狂名あり

天明三年 仲兄十九歳の詠草あり

廣厚子

中庸曰

今夫天斯昭々之多及其無窮也日月星辰繫焉萬物覆焉今夫地一撮土之多及其廣厚載華嶽而不重

詠

詠

詠

詠

この部門切なる妹秀の系統せしと考へ書き遺へ
ぬひ〳〵なる夜外曲婦を為すべき〳〵のべし　おやこの
書遺総の中よりの小女八秀の倶〳〵る下女へ

笑ん

一女　円安さん人　弐人

寅赤挽町柳生但馬守様屋敷
御出而不出遊出無之ゟ
ゟ

寅歳九月年　月五日

一ツ橋御
出張

山名勘兵衛
滝沢蟹丸

兼て滝沢御様
来人三年中

正月十五日

滝沢蟹丸

四

仲兄鶏忠君名興春 後沢聖門 星跡十五

廣厚

中庸曰

今夫天斯昭々之多及其無窮也日月星辰繫焉萬物覆焉今夫地一撮土之多及其廣厚載華嶽而不重

仲兄天あの俳名を巳克亭好々とよのゝ天明五年の歟ようあるべくも鶏忠と号す

天明三年 春秋十九歳の祇草

卯歳 巳月

春色伊達の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

天明二年仲兄十八歳の歌草

安永中より高田氏は繁昌して苗田家より仕へ（ゆひとりの所へ）

天明四年の春の歌草

仲兄の門ゆかりの椿・桃の花を天明のそのかの伯父の庭へ分れんとて生出でこの年初めて花さきそめるなり

天明四年秋仲兄奉伯兄郵書　この秋伯兄の主君戸田下総守殿より倶に甲府へ行き帰り

天明四年の夏鶴忠子苗田家を辞し去る後伯兄新任より別る任官を求めるため江の口上書を行へ投ぜず未だ未詳

天明四年仲秋奉羅文君郵書　書中にあるとあるは俳諧のことなるべし

九月廿日　滝澤清節

九月十四日　滝澤清蔵　毎春

滝澤東次郎殿

天明四年初冬郵書

[illegible]

東次郎様　清蔵

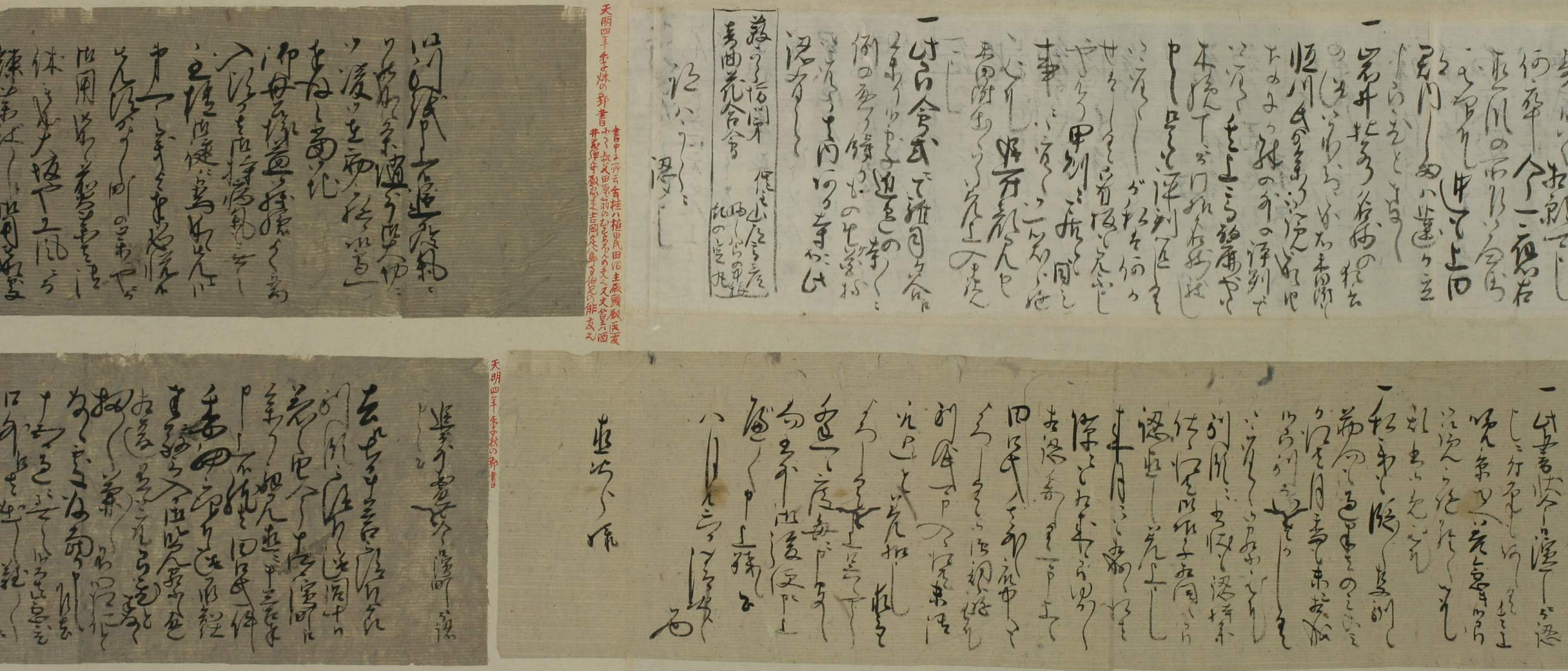
十月十六日

[illegible]

一[illegible]

一[illegible]

一[illegible]



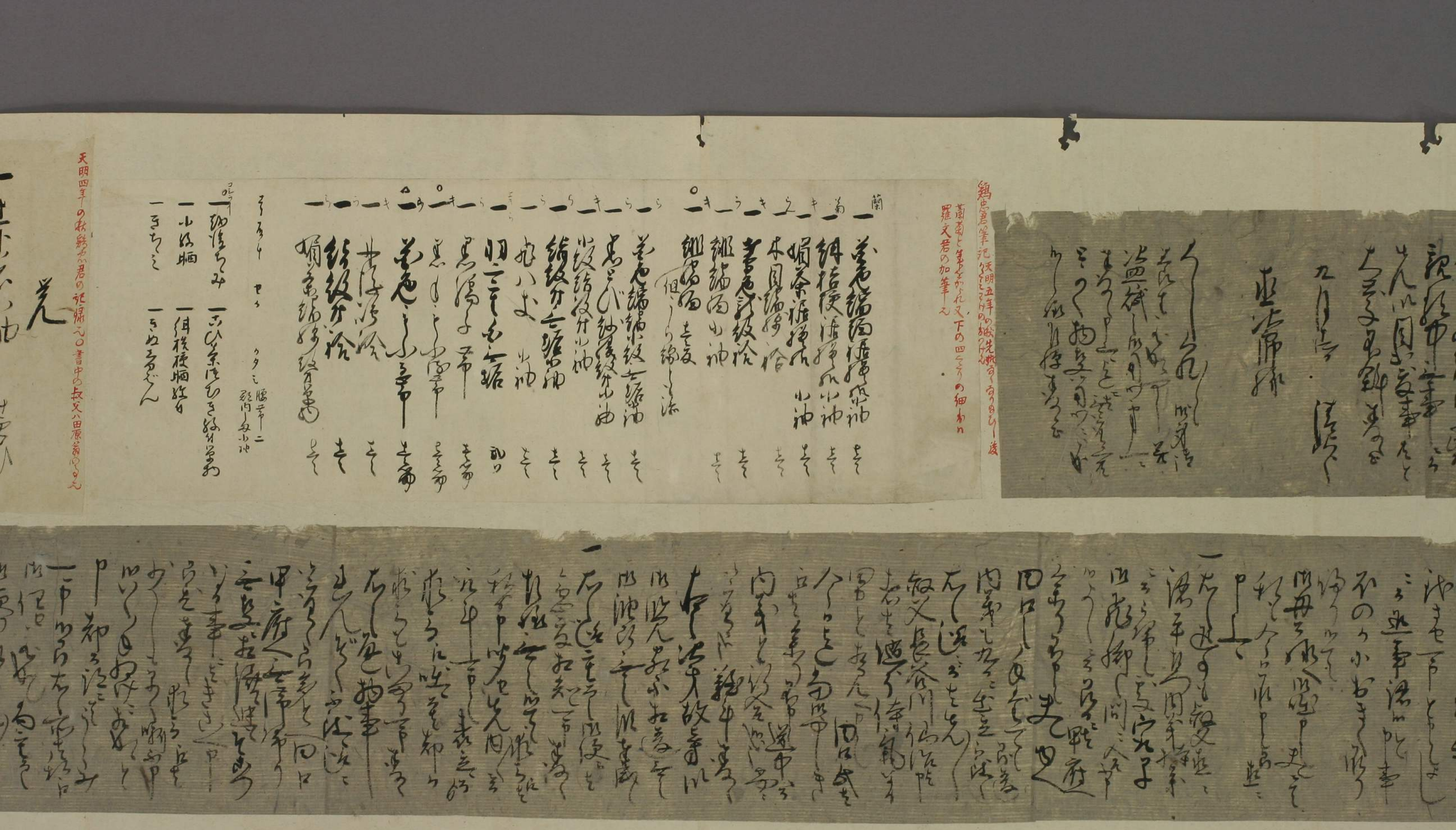
天明四年　秋の部書

書中に所云香桂院植田氏田沼主殿頭殿医師
ゆゑ坂武田原翁のむすめ方の夫之丈丈貴元酒
井雅楽守殿の家来吉岡氏冬郎る俗名の俳友

天明四年　秋の部書

天明四年　李秋の部書

一同文学之儀ニ付、[illegible]
[illegible]
[illegible]



蘭斎と第七かれ又下の四ことりの細かい羅文君の加筆え

鍋忠恵筆記天明五年の秋先輩百〜百の日記一後

天明四年の秋紀州君の江戸帰えり書中の叔父八田原翁のもえ

外祖吉尾翁俗稱 引寄手簡二通

解説 元二書中二所云移るとあるは吉尾翁の弟松沢公剛のなり べきの人なり 移るの用の事の当時吉尾翁は甲府に居松沢公剛は原庄屋守殿の郎中なるまゝ 書ハ吉尾翁の死去保の死去 紀州家より細川家より仕へ

この頃ハ享保元文の間のなり 光孝はまゝ母なり 状なり

外祖吉尾翁俗稱 引寄手簡残欠二通

書中ハ所云田口氏ハ当時羅文君の同僚なり 平左衛と稱なり田口氏は仕へ共ハ甲府ハ在り

天明四年の秋終わり君の死歸る 書中の叔父八田原翁のなり

光

一 御注ちみ　一 ひ糸注ちき給ひ
一 小袖帽　一 俳諧硯箱
一 きちこ　一 きぬ

文叔父
真中家與羅文書二通

真中隼太郎八文叔父の筆跡君時川口村まあり
の筆者時川口村まあり
安永二年の比の書翰
一通八天明中の書翰

外大叔父松澤蔵俗稱
權左衛門宛

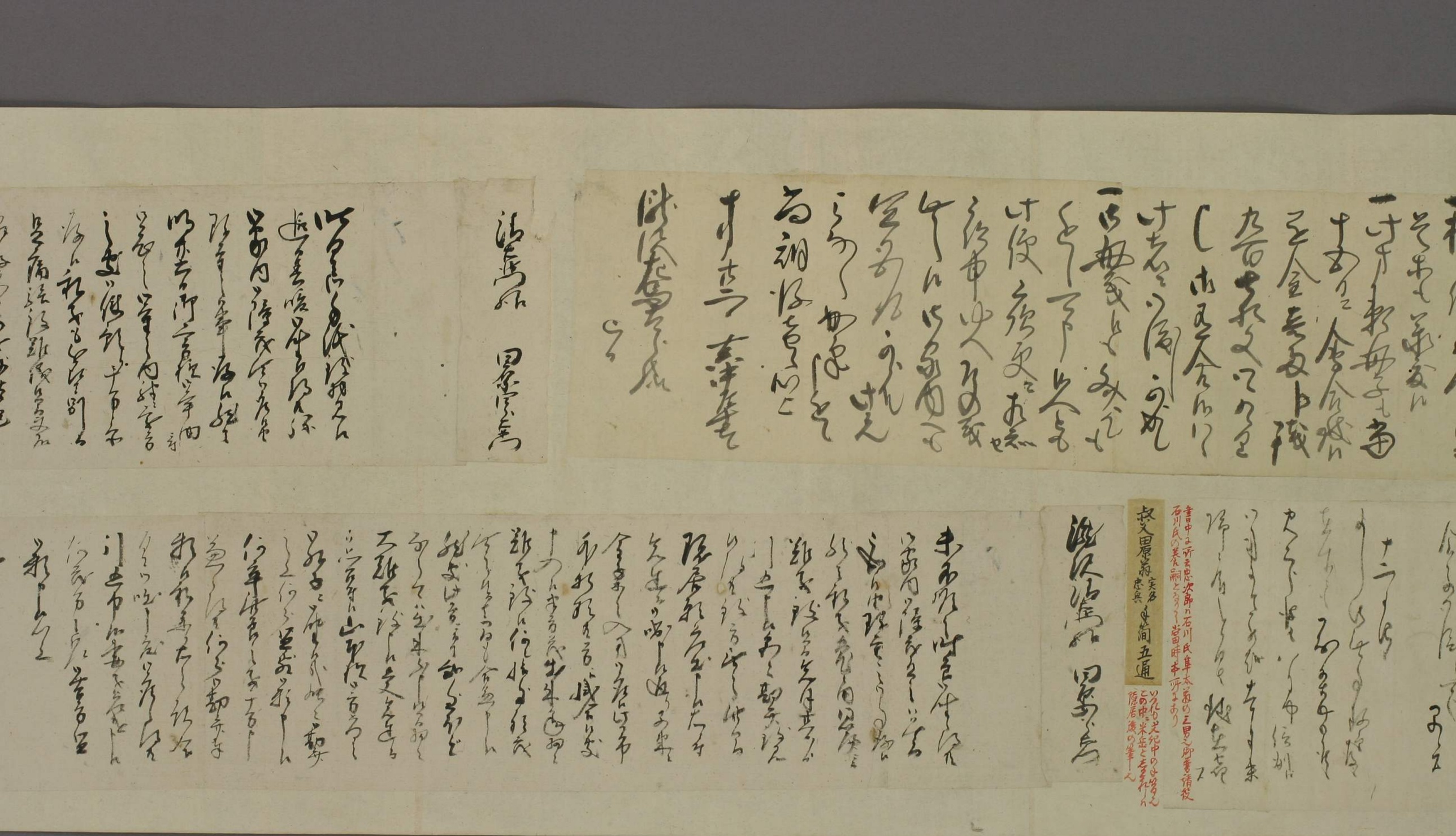
先祖叔父之書中の
るを別に善来の注より

大和文
真中家興羅文書二通

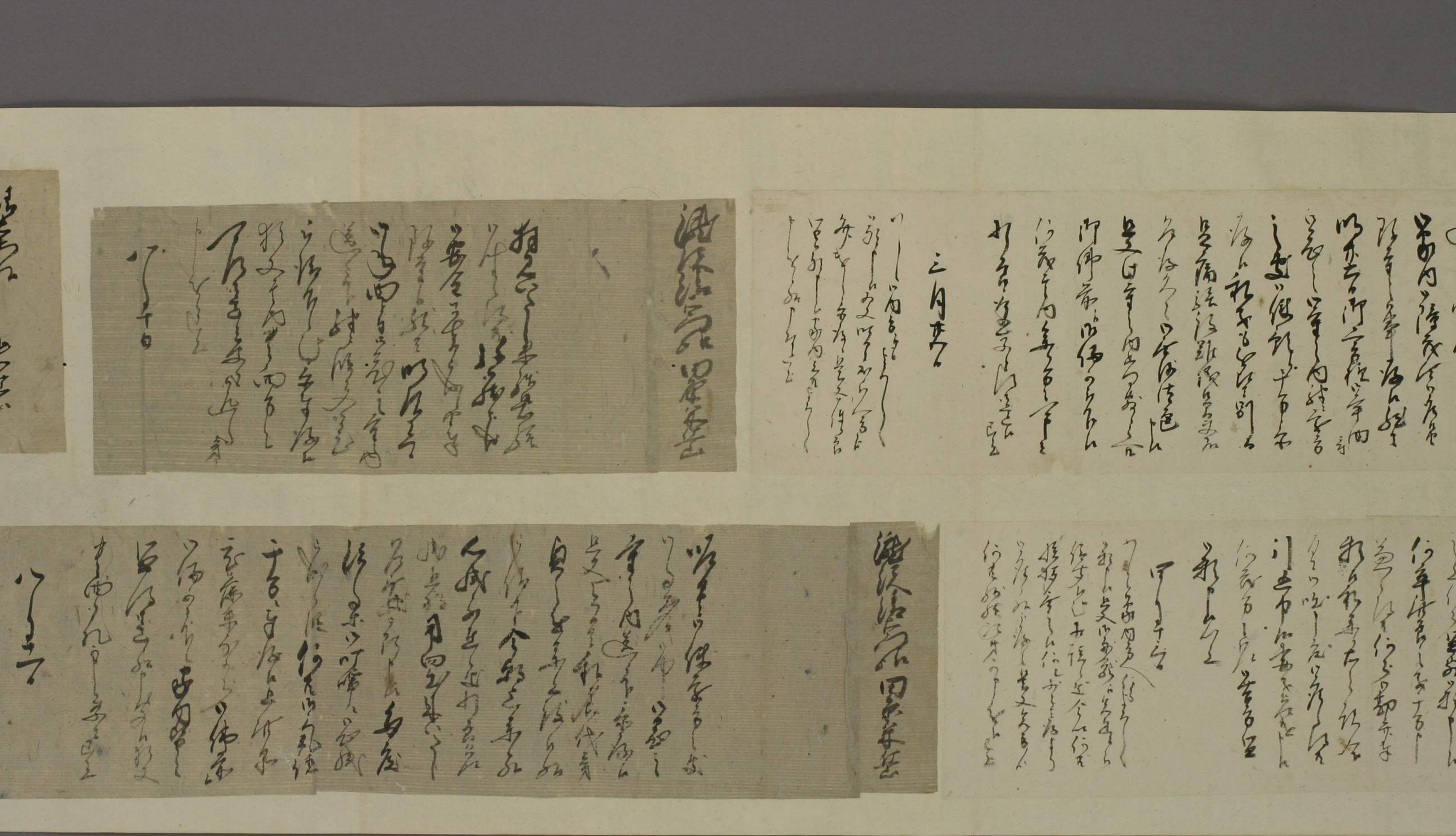
真中隼太郎の祖父清時川口村にあり一通は安永三年の頃の書なり下の一通は天明中の書なり

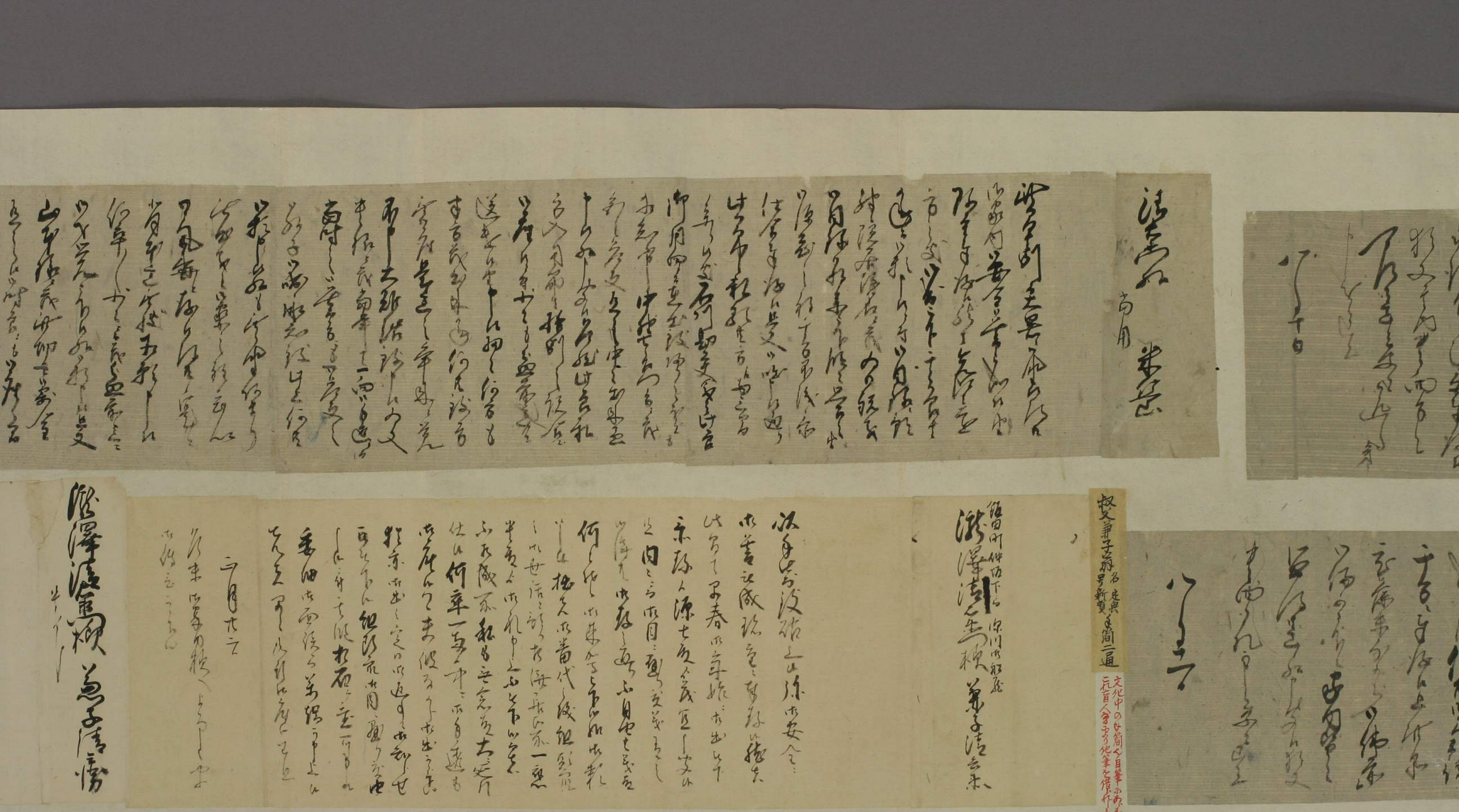
解云志賀村、在武州埼玉郡松平家の知行所也
左原太八同村ノ村目付也
源六を村長佐左衛門が男
之松村氏
この左職を
嗣く者多
又の村長なり

書中に所云忠次郎は石川氏隼太郎の三男之郎書清殺
石川氏の養子嗣となりて当時本所にあり



故文農翁実名忠兵衛 書簡五通
書中に所云忠次郎ハ石川氏隼太翁の三男之御書清殺
石川氏の養嗣となりし当時本所まあり
いづれも光紀中のよ[illegible]
この中に米岳と[illegible]
隠居後の筆[illegible]





叔父兼子法師名遠真号新賀ゟ簡二通

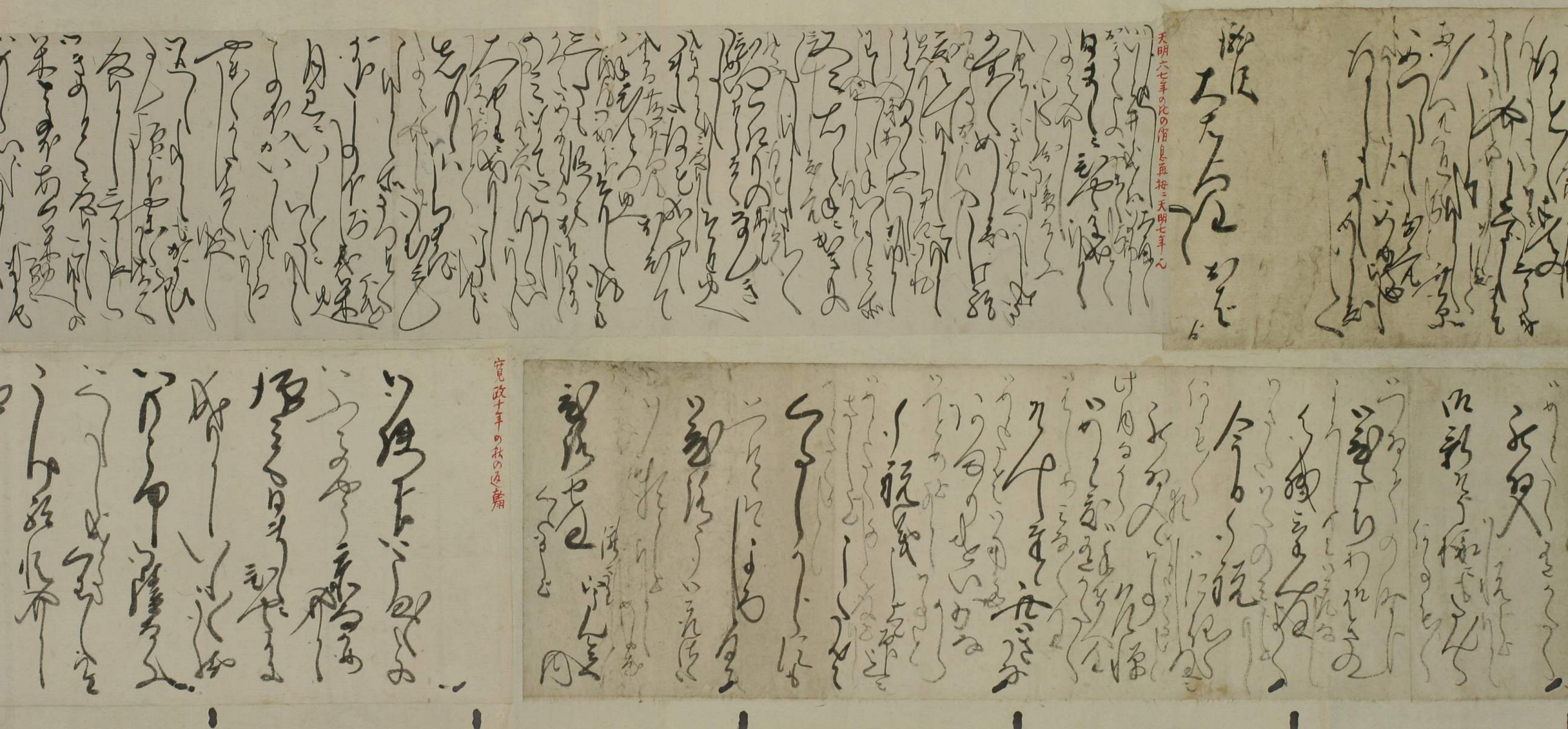
文化中の比筆にあらず
元旨〈曾おゝ他筆を借作ゝ

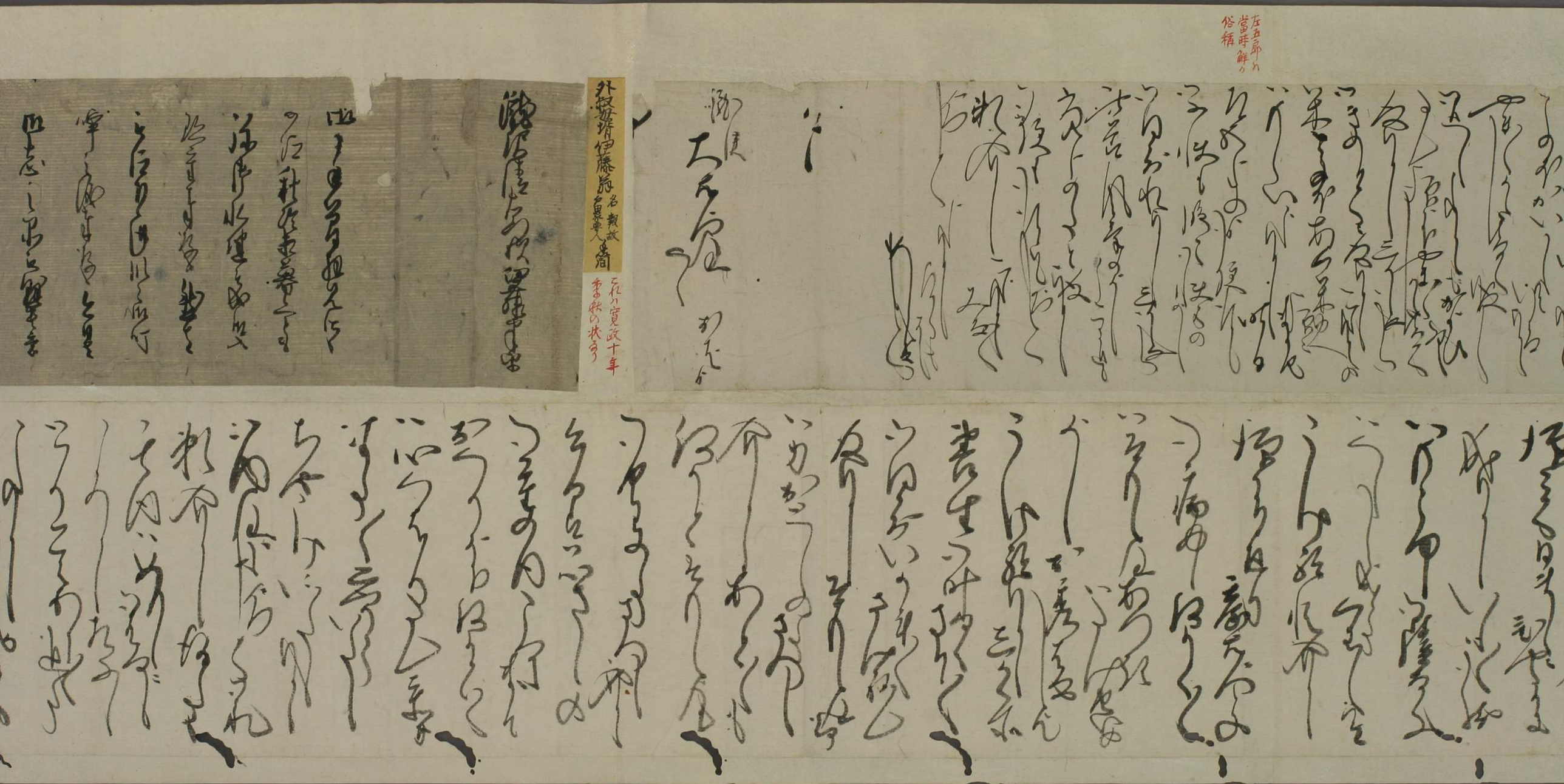
澤潟亀頼為子清房

外伯母　於木牛後後室
智恵刀自尼の御消息五通

これハ天明六年の春の
ぜうたこゝろ

澤潟重頼　為左衛門

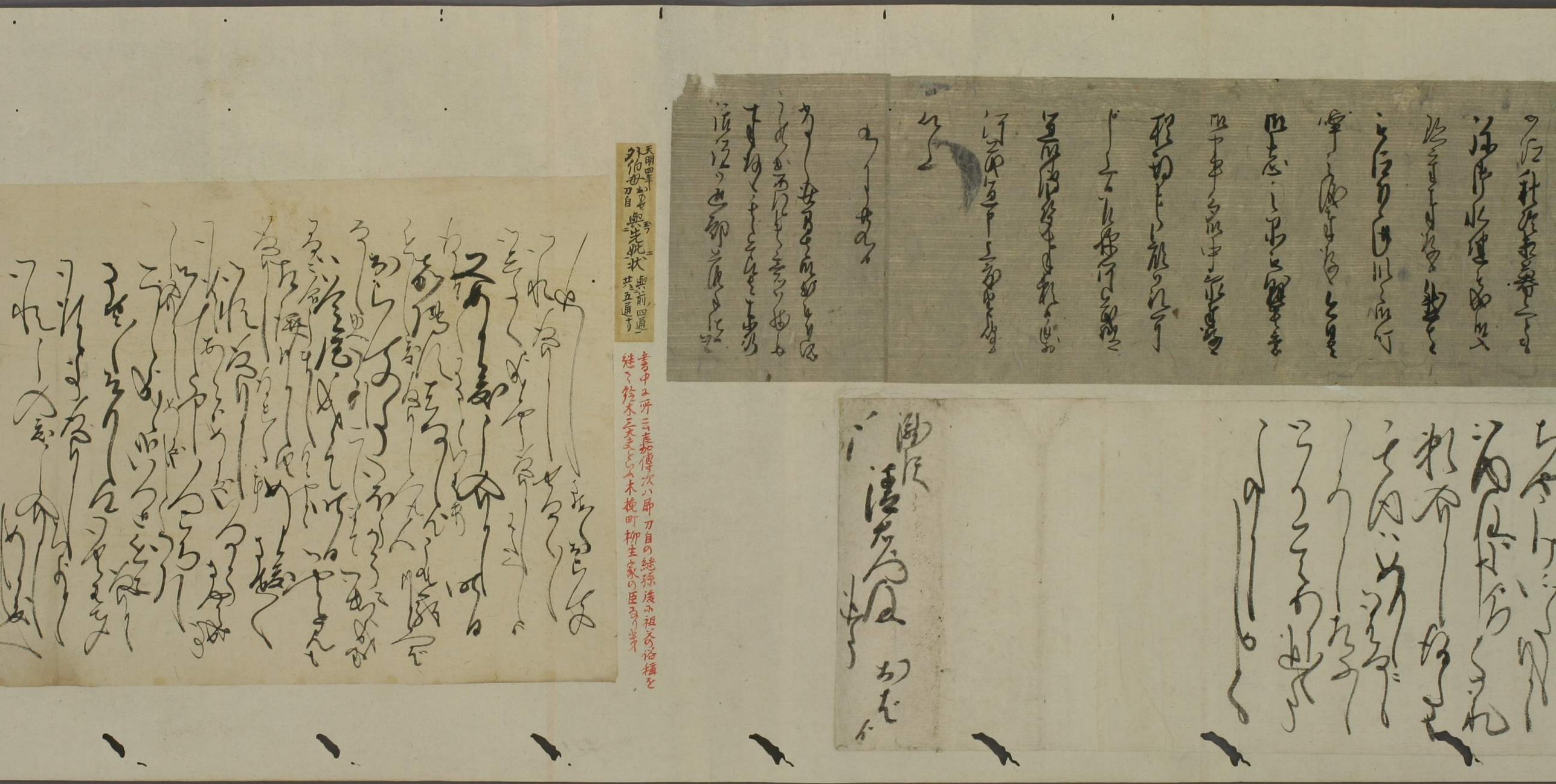




左五郎ハ
當時鮮ノ
俗稱

外記殿清水伊藤殿名報政
名墓碑入番

元ハ寛政十年
秋の狀ナリ



天明四年ノ書ニ
外伯母カ刀自 與先祝状 與前四通一
共五通方

書中ニ所云長祝傳次ハ即刀自ノ継孫後ハ祖父ノ俗稱ヲ
継ク故ニ文末ニ木槻町柳生家ノ臣ヨリ出ル

天明四年鶏冠君歌草

上の十五通そもそも
そこ〻十六通あり

天明六年の夏兄弟席上にて二吟

そもそも
結句ひつ紀の日席上にて吟ずる三吟なり

三吟之二　鶏忠倉おの〳〵自筆之近勝ハ伸兄の狂名之　この年八月四日ニ伸兄の早逝を悲しみの句

三吟之三　山梁ハ鮮くるゝ岩田時　狂名を山梁貫渕とゆひし　時ハ伯兄二十八歳　伸兄廿二歳　鮮二十歳

解云上より貼〻る外大叔父松澤翁のうち母方與へのひ書中に所云剛直の郎
松澤翁のあく〻先世の役者ん法なあく〻あく〻松澤翁知遇つとのひ生を見し又服部番長の
土井山城守殿の家臣〻う松澤氏なる由縁あり常に三郎八郎兄鶏忠君の小名なるより明
和中彼服部生存死とせ〻とに〻う伯兄羅文君をなの養嗣に乞ひ〻とも 先考
先〻のなまるひ 諸あつまるを〻〻〻みの假〻業ちまと〻つ多慶医生某甲乃ち義子
と〻〻服部の家を継ぎのひ責に礼を服部源弥とらへ〻これ則 先考の母方の義子
羅文君みの義弟に源弥の父兄の恩義あく〻ねく〻も元より因縁とらへ〻
三行の外合はきり〻後年々諸国の書状もく〻一あるはるをり〻とえ特に義の人
なり〻あや 先考下世ありのひと記速よるの訃を告ぐれらと吊状も及ぶく〻遂に疎
遠なるり〻とのの故前巻に貼せ〻 先考與松澤翁書と合〻えく〻なの篤義の
世まさられるひ〻をさ〻へ〻

龍澤解 謹注釋

余嘗所貼 父祖及親戚通家〻送墨凡八卷
是卷則伯兄羅文君仲兄鶏忠君叔父田原兼子二

余嘗所貼　父祖及親戚通家〻遺墨凡八卷
是卷則伯兄羅文君仲兄鶏忠君叔父田原兼子二
叟母堂松澤翁外伯母鈴木刀自外叔母吏伊藤生雪
〻簡牘也吾胄室秘藏亦勿與彼好事者流〻書
画帖同日而視之即書月如左

一曾祖瀧澤信清軒大人詠草二本合弓　一卷
一父祖及兩亡兄遺墨小軸　一卷
一父祖及親戚通家遺墨中軸　一卷
一大父淨頓君並　先考先妣遺墨　一卷
一伯兄羅文君仲兄鶏忠君及親戚簡牘即此卷　一卷
一曾祖書寫阿弥陀經　一卷
一羅文君甲府道中日記俳諧十百韻序共二卷後為一卷

通計七卷每本數十通纂次表装畢

文政五年壬午冬、十一月下浣　瀧澤